

宮城音弥著

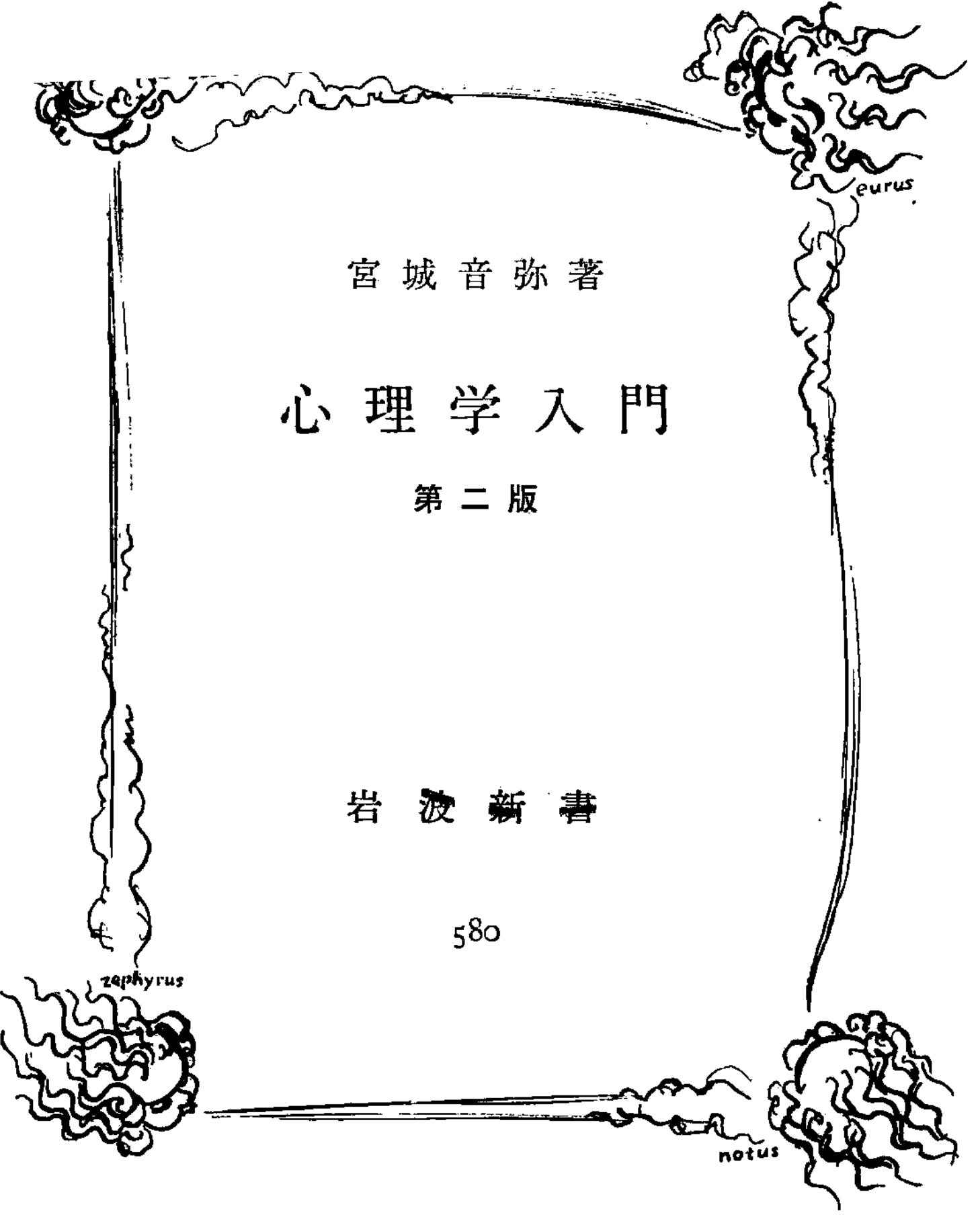
心理学入門

第二版



岩波新書

580



宮城音弥著

心理学入門

第二版

岩波新書

580

宮城音弥

1908年東京に生まれる

1931年京都大学文学部哲学科卒業

専攻—社会心理学，異常心理学，
臨床心理学および精神医学

現在—東京工業大学名誉教授，日
本大学教授，東京教育大学
講師(大学院)

著書—「夢」「精神分析入門」「性
格」「神秘の世界」「愛と憎
しみ」「天才」「人間性の心
理学」(以上岩波新書)

「日本人の性格」「劣等感」

岩波小辞典「心理学」(第三版)

訳書—フロム「未開人の世界，精
神病者の世界」カッシーラー
「人間」

心理学入門 第二版

岩波新書(青版) 580

1965年12月30日 第1刷発行 ©

1974年4月30日 第14刷発行



著 者 ^{みや}宮 ^ぎ城 ^{おと}音 ^や弥

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

東京都板橋区板橋 4-47-7

印 刷 者 山 田 博

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
一ツ橋 2-5-5

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・永井製本

第二版 序

本書を最初に公にしてから、十数年が経過した。当時としては、この内容はかなり新しいもので、そのころの概論書にない題目や概念をふくんでいた。しかし、その後、心理学の各領域の発展はいちじるしく、新しい用語も導入されたため、ここに内容を大幅に改めることにしたのである。

本書については二つの反対の批判があった。

第一は、本書は題名どおり、心理学入門書であって、やさしく書かれており、あくまで啓蒙書であるから、著者に将来、本格的な概論書を望みたい、という意見であった。

第二は、本書は意外に、むずかしい問題をふくんでいるし、その構成にも、個々のテーマにも独得のものが少なくないから、英語に翻訳したらどうか、というすすめであった。

私自身は、この両方ともあたっていると考えるのである。

私は、なるべく、やさしい表現を用いたいと願った。「大著は大悪である」というレッスングのコトバにもかかわらず、わが国には大著を良著と思いちがいをしている人が多いようであるし、形式上のむずかしさと、内容上のむずかしさを混同して、わかりにくい本は、抵抗を感

ずるゆえに、深遠なものだと誤解している人があるように思われる。私は、このような考え方に抵抗した。

しかしながら、私は、あくまで、これを私の心理学概論としたいと考えた。そして、私の見解——本能、記憶、失語、性格、知覚などについての——を、このなかで述べたのである。

この第二版もまた、趣旨においては右と変わったものではなく、新しい研究結果を取り入れ、内容をまったく一新したけれども、それは、あくまで私の立場を離れたものではない。第一版を公にしたのち、私はつぎの著書を同じ趣旨で世に問うた。（すべて岩波新書）

『夢』

『精神分析入門』

『神秘の世界』

『性格』

『愛と憎しみ』

これらで、とくに詳しく問題にした部分は、本書ではいくぶん省略することにしたから、立入って検討したい方は、右の諸著を参照していただきたい。

なお、つぎは小辞典ではあるが、純粹の心理学用語の数において、また、概念を明確にした

点において、他のものにすぐれていると自負しているし、諸外国の諸辞典を参考にしたものであるが、それらにひけをとらないつもりである。

岩波小辞典 『心理学』(第二版 一九六五年)

一九六五年十月一日

宮 城 音 弥

口絵について

母の胎内

この絵を画いたのは、発病のとき二十三歳の有能な青年バイオリニスト。某交響楽団の団員であった。とくべつに絵を学んだことはなかったが、はじめて診察したところには興奮してこのような絵をさかんに画きつづけたのである。

この絵は彼自ら「母の胎内」と題したもので、右下にあるのが目で、これが母の胎内をのぞいていると説明していた（本文二二九頁をみよ）。

ポリグラフ（東京工業大学心理学研究室）

ウソ発見器ともいわれる。感情（情動）の動揺によって生ずる呼吸、血圧、脈搏、みやくはく血暈、皮膚の電気抵抗などの変化を記録する。この写真のばあいは、脳波を同時に記録している（本文一九頁をみよ）。

目次

第二版序

第一編 人間性の基礎 1

第一章 適応——行動の意味 1

個体と環境／心とは何か

第二章 本能・習慣・知性——行動の基本型 2

本能／習慣／新しい環境／知性

第三章 感情——行動の操作 10

快と不快／感情の種類／情動／情動の表出／恐れと怒り／心身症

第四章 気質——行動様式の類型 24

性格と気質／精神病と気質／気質と体型

第五章 欲求——行動の動力 35

必要と欠乏／欲求の測定／欲求と行動

第六章 知 覚——行動の手がかり 40

知覚と世界／知覚欲求／物の知覚／知覚と行動／知覚の種類

第七章 学 習——行動の変容 54

学習とは何か／条件づけ／習慣と記憶

第八章 注 意——行動の構え 65

行動の方向づけ／心的緊張力

第二編 人間性の発展 69

第一章 思考と言語 69

思考とは何か／概念と抽象／サインとシンボル／第二信号系／
意味差別法／言語と失語／言語的知性

第二章 観念と心像 88

観念・心像、知覚像／思考と心像／創造的想像

第三章 意識と意志	93
適応と意識／待機と意志	

第三編 人間精神の深層	100
-------------	-----

第一章 原始反応	100
----------	-----

不適応時の反応／近道反応／防衛反応／盲従・拒絶反応

第二章 原始精神	106
----------	-----

未開人心理／無意志の世界／模倣・共感・暗示

第三章 無意識の世界	114
------------	-----

意識と無意識／無意識の存在／無意識と記憶／無意識と思考／
無意識と芸術

第四編 人間の個性	130
-----------	-----

第一章 性格	130
--------	-----

性格と知能／性格の諸側面／勝気・弱気・強気／性格検査法

第二章 知能	144
--------	-----

知能とその段階／知能検査／遺伝と環境

第五編 社会的人間	155
-----------	-----

第一章 人間性の社会化	155
-------------	-----

集団心／野生児と孤立児／性欲とその変形／自己保存欲求とその変形／知覚と感情の社会化／記憶の社会的ワク

第二章 人間の相互関係	175
-------------	-----

相互心理学の基礎／一時的相互関係／持続的の相互関係／相互関係と知覚・感情

第三章 集団的行動	188
-----------	-----

群集心理／世論と態度／流行／宣伝

結語	198
----	-----

事項、人名索引

引用、参考文献

第一編 人間性の基礎

第一章 適 応 —— 行動の意味

個体と環境

アメーバは食物にふれば、これを体内に取り入れ、毒物に出あえばからだを球状にして、その表面をできるだけ小さくする。そこには、物体が外力のままに動かされるのちがつて、環境に対する働きかけがある。

一般の動物はアメーバにくらべると、その構造は、はるかに複雑であるし、その行動もアメーバのように簡単なものではないが、やはり、食物があれば取りいれるし、危険があれば、のがれるし、環境に応じて都合のよい行動をとっている。このような行動を適応行動という。

適応するためには、外部の状況をつかんで、これに対して働きかけるだけでなく、体内の状態に応じた行動（たとえば胃が痛むので横になるとか、つかれて眠るとか）をとらなければならぬ。

これらの適応を行うために、ある程度、進化した動物には環境の状態を感じ、これに応じた運動（反応）をおこすための装置ができてゐる。これが神経系統であつて、「心」というのは神経

系統によつて、外界に適應する現象である。適應はかならずしも成功するとはかぎらない。また、無生物の運動に近い行動もないわけではない。しかし、適應をはなれて「心」ということを考えることはできないのである。

心とは何か

昔は「心」という「物」があると考えた。「机」という「物」があり、「花」という「物」があるように、「心」という「物」があると信じていた。おそらく、今でも、そう考えている人があるであろうが、今日の心理学者にとっては「心」は「物」でなく「働き」である。「足」が「あゆみ」という「物」を動かしているものでないように、神経系統が「心」という「物」を動かしているのではない。歩くことが「足」の「働き」であるように「心」は神経系統の「働き」である。「心」というコトバをつかわずに、ふつう、「精神現象」とか「行動」(感ずることも、考えることも、これにふくめる)とか、いうのは「心」という「物」があると誤解されるのをさけるためである。心理学は精神現象または行動を研究する科学である。

第二章 本能・習慣・知性 — 行動の基本型

本能

ネコがネズミを追いかけるのも、クモが巣をつくるのも、すべて外界への適應である。ところが、ふつうは、ネコはまだ一度もみたこともないネズミのような小さい動物を追いかけるし、クモは一度もつくる練習をしたこともないのに、巣をみごとにつくり上げる。

これは生れつきもっている適応の型である。

ある種のハチは卵を生むと、それがかえったときの用意に、そのそばに食物を用意しておく。この食物は生きた虫であるが、針でさして神経を麻痺^{マヒ}させ動けなくしておいたものである。しかも、これは卵がかえってから自分で食物をさがせるまでに、ちょうど十分な量に相当する。

動物はこのように、生れつきの適応方法をもっている。それは、ある建物の、どの部屋でもあけることのできるマスター・キーのようなものであつて、このような行動の型を本能という。本能は生物の「種」によって一定した、生れつきの行動の型である。

しかしながら、本能的行動が、(一) 同じ種類の動物でも完全に一定したものではないこと、(二) 絶対に固定していて、生れたのちに全く変らないというものではないこと、(三) 生れた瞬間から完成しているものでないこと、に注意しなければならぬ。

まず、本能が「種」によって一定していると考えていた時代があるが、これはほんとうではない。種によって、ほぼ一定している身長や体重にも個人によってちがひがあるように、本能も、個体によって差がある。

つぎに、ふつう、ネコはネズミを追いかけるが、生れて五カ月たったネコでネズミが背中ののつても平気でいて、ネズミが走り出してから、はじめて、これを追いかけたという報告があるし、ネコにネズミを見せながら、電気でショックを与えたら、しまいにネコはネズミをみると逃げるようになったという実験もある。生れつき、という意味は、生れてからの条件が

ふつうであるかぎり、一定の行動をしやすいということである。

さらに、本能的行動というものが、生れつきであるとしても、成熟が関係しているし、(ツバメは卵からかえって、すぐに飛ぶことはできないが、一定の時間たつと飛べるようになる。しかも、きゅうくつな箱の中に入れて飛べる機会を与えないでいても、ある年齢になって、フタをあけると飛び立つ。)生れてからのちの練習の結果、だんだんに完成される。

ニワトリのヒナは生れてからすぐに、穀物をついばむ運動をする。しかし、最初の日から完全にできるものではなく、はじめは横をついたり、とちゅうで落したりして、うまくできない。ある学者の研究した結果によると、最初の日は、およそ一五%、第五日目になって七二%、第一五日になって八五%であって、一〇〇%に成功することはない。しかも、それはつづくことによつて、だんだんに練習が完成してゆくのである(フリード、シェパード)。

多くの実験の結果によると、ついばみは神経系統が自然に発達するために、うまくなることは事実であるが、やはり練習ということが必要であつて、生れつき整備されているものではないのである。

昔の心理学では本能という能力があると考えていたが、今日では右にのべたように、本能は生れつき持っている行動の型とみなされる。したがつて、本能は下等動物にほぼ純粹な形でみられるが、高等動物では一般の適応行動の土台になつてゐるにすぎない。

食物をとつて口に入れてのみこむ——これは比較的、きまつた形のものであり、生れつきで

あつて本能であるが、どうして食物をみつけるか、選ぶか、ということになると、生れてからのちの経験が入りこんでくる。食物をのみこむといった「完了行動」とエサをさがすような「予備行動」または「欲求行動」を分類する人もあるが、前者は真に本能的なものであり、後者は、のちの経験が入りこむものであつて、いわゆる本能的行動には、真性本能と仮性本能の二つの要素があるといつてよいであらう。

習慣

ある建物のすべての部屋をあけられるマスター・キーが本能であつた。これで、その建物という、きまつた環境のトピラをひらくことができる。

しかしながら、このマスター・キーは新築された別棟むねにはヤクにたたないから、のちになつて、この別棟の各部屋をあけるマスター・キーをつくらせなくてはならない。この、のちにくるマスター・キーに相当するのが習慣という適応行動の型である。

生活をしているうちに、類似した環境に出あうことはかなり多い。朝、太陽がのぼつて、夕方には暗くなる。このリズムはいつも同じようになりかえされているから、われわれは毎日、類似した環境に当面する。いつも、ある時刻に主人が出てきてイヌにエサを与えるとすれば、イヌにとって類似した環境がくりかえされるから、きまつた行動の仕方ですべて適応できる。

このようにして、生れてからのちに、われわれは、一定した行動の型を身につける。この行動の型を習慣という。この第二のマスター・キーのおかげでかなり多くのトピラをひらくことができるわけである。

人間の行動は歩くにしろ、たべるにしろ、考えるにしろ、笑うにしろ、ほとんど習慣という、きまった行動の型によってなされる。

本能が一定している行動の型だといっても、個体により、状況によってちがっていることは、うえにのべたとおりであるが、同じ習慣も個人個人によって、いくぶんはちがっているし、実際の状況によって変化することは、もちろんである。

習慣は後天的につくられたものであるから、そののちの条件で消えることもあるが、強固につくられたものは、その人間の一生の行動を支配する。それで、習慣をたんなる行動の型とみなさず、個体を動かす力と考える人もある（デューイ、ウッドワース、トールマン）。

船員を長くしていた人は、のちに銀行家になっても習慣的に海をあこがれ、音楽家は晩年に隠退してからも楽器を手にしようとし、貧乏だったためにケチな生き方をしてこなくてはならなかった人は、大金持になってもケチな行動をするといった例をあげて、オルポートは、いったん習慣がつくられると、他の欲求から独立した欲求が生れることを主張した。「機能的自律性」の説である。

しかし、私は本能のばあいと同様、習慣を行動を動かす力と考えず、たんに後天的につくられた行動の型とみなしておく。

新しい環境

本能と習慣は、きまった状況に対する一定の適応方法であるから、建物の各部屋のトビラをひらくマスター・キーにたとえた。それは、一つの建物では、どの部